
ボクサーの異世界転移

赤海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクサーの異世界転移

【Nコード】

N3218BA

【作者名】

赤海

【あらすじ】

過去にボクシングの大会でいくつもの優勝を飾った経験がある『みつたつばき深唄翼』。大会目前、事故に遭い一生ボクシングが出来なくなってしまった。その日から何事にもやる気が起きなく自暴自棄状態。それから1年後のある日、買い物に出かけようと玄関のドアを開けたら・・・

真っ白な光に包まれた。

ブローグ

俺こと深唄翼^{みづたつはな}は、大勢の人から”天才”と呼ばれていた。理由は、ボクシング。

親父がボクシングジムの会長で俺は小さいころからサンドバックに拳をぶつけていた。

親父の強要で最初は、いやいややっていた。ジムには、周りに知らない大人ばかりで普通に怖かった。

10歳の時、いつものように練習をしていたら親父が「スパarringをしないか？」

と言ってきた。

いい加減、特訓じみた練習に嫌気がさしていたので俺はすぐに承諾した。

スパの相手はジムの中で一番弱い人だった。

俺のスタイルはアウトボクサーで相手はインファイター。

周りの大人は勝てるわけがない、と言ってきたから見返してやろうと思った。

結果、俺は勝った。

さすがに何発かはもらったが、ダウンは取られなかった。

その日から俺は変わった。

戦いの楽しみ、勝利の喜びを知ったから。

強い奴と戦うため、もっと勝利の感覚を味わうために全ての時間を練習にいやした。

中学を中退。時には一日の三食を全部ぬかしたこともあった。

プロテストに15歳の若さで合格。

俺の要望ですぐに試合に出させてもらった。

優勝は出来なかったが、4位になった。

相手が、大人と考えれば最高の結果だと言える。

けど、俺は納得いかなかった。

ねらっているのは、王者の座。

だから今まで以上に練習をつんだ。体がぶっ壊れるぐらい。

そして俺は16歳で優勝の栄冠を勝ち取った。

それから快進撃が始まった。

同時に“天才”の名も広がり始めた。

ブローグ（後書き）

アウトボクサー

ヒット&アウェイを主体に攻める遠距離ボクサースタイル

インファイター

一発が勝負を決める近距離ボクサースタイル

一話

タツ、タツ、タツ、タツ、シュツ、シュシュツ

走りながらシャドウをまぜる。

シュツ、バツ、シュツ、シュシュツ、シュツ、バツ

体は軽い。割と調子が良い方だ。

試合まで一週間。この感じが続けばいいけど。

一週間後に優勝のかかった大事な試合を控えていた。少し緊張気味で、いつもより早く起きたので朝のロードワークをこなしているところだ。

いつもと同じルートで、いつもと同じメニュー。だが、いつもと違うのは霧が濃くかかっていることだ。

けど、大して気にしなくていいだろう。

と、思って曲がり角をまがると

ブオーン

トラックが目の前に迫ってきた。

* * *

「・・・っ!？」

ガバッ

周りを見渡すと自分の部屋。

全身汗まみれだったが特に変わった様子はない。

「・・・夢、か・・・」

ふと目を向けると、今はもう『使えなく』なった左足が。

「ふう」

ひかれそうになった時、とっさの判断で後ろに飛んだのだがギリギリ間に

あわず左足だけがまきこまれた。

意識が一瞬でとんだ。気が付いたら病院のベットで横になっていた。俺をひいた人が電話したらしい。

横になりながらずっと考えていたのは足のこと。

だが医者から言われたのは、衝撃的な事実だった。

『もうボクシングは・・・』

「こっちは現実・・・」

もう戦えない、もうあの興奮は味わえない、もう拳を振るうことはできない、

もうリングでは踊れない、もう、もう、もうもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつ

もうもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつもつ、

、、、

あの日から約2年。

俺こと深唄翼は18歳になった。学校とかにはいつていない。歩けるけれど、歩く気がしない。

高校生らしいことをやるうとは思わない。簡単な話、すべてにやる気が起きない。

「朝食ねえな・・・」

仕方ないから、ベットに投げっぱにしていたジャージをはおりながら重たい腰をゆっくりとおこす。

財布を確認する。かなり入っている。

家に親はいない。母親は俺が幼いころに他界した。親父は、ボクシングができなくなった俺を見捨ててでていった。

だから家には俺一人。ご飯は自分で買い出し。

考えていると玄関についた。靴を履きドアを開けたら

真っ白な光に包まれた。

こんな感じの展開、二回目だな・・・

二話

ガサガサ、クガー、ピロピロピロ、・・・

「・・・ん？」

騒がしい音のせいで目が覚めたら木に囲まれていた。
俺は森の中でたたずんでいた。

「ここは・・・森？」

草木が生い茂っている光景を見たら誰だっけ森だと思っただろう。

「俺は確か、買い物に行こうとして・・・」

光に包まれた。そこで、どっかに飛ばされた。

いろいろと悩むとこだけど、こんな神隠し的な現象を解き明かす方が無理だろ。

とりあえず人に会わないと分らない事だらけだし、そもそもここが日本かどうか怪しいところだ。
まず、この森を抜けないと。

ガサガサッ

??。近くの草むらから音がした。

ガサガサガサッ

それもだんだんこっちに近づいてくる

！！。誰か人がいるのか。よし、なら聞きたい・・・。

待て。こんな山奥みたいな森に人がいるのか。もしかしたら、危険な野獣のほうの可能性は高くないか？

人間であってほしいけど、野獣かもしれない。

『何か』の気配が近寄ってくる。

さあ、どっちだ。人類か、ケモノか

・・・ガサガサッバツ

答えは

「・・・、両方？」

「プググ・・・」

出てきたのは、

二足歩行で

子供サイズ。

ここまでならまだ人類と呼べる。けど

全身緑色

醜い顔

豚のような鼻

こん棒を振り回し

着衣と言えば腰に布だけ

一番気になるのは頭上に輝いている『?????7Lv』・・・名前か？

結果、俺の小さい脳みそが出した答えは

人類とケモノを合わせて・・・

化け物（笑）

あつ、俺に気がついた。

うえっ 気持悪。つばを周りに振りまきながらこん棒を構えてこっちに迫ってくる。

あれで殴られたら死ぬよな。でもどうせやりたい事ないし・・・。
どうしようかな？

・・・

あんな奴に殺されたら俺のプライドが許さん。
出来るだけ左足を使わないでやれるか・・・。

「プガーッ」

「っ!？」

化け物（笑）がこん棒を振りおろしてきたが、とっさに反応して右に飛んだ。

こん棒が地面をえぐった。ヒュー、あぶね。

ん？ なぜ『（笑）』が付いているか？

フッフ（笑）

俺が名付け親になったからに決まっているだろ（笑）？

今のは忘れてくれ。

さてと、動きは見えるな。プロのボクサーより倍以上遅いから右足だけでもいけるか。

化け物（笑）がこん棒を横にスイング。

「はっ」

一歩後ろにさがってかわす。

化け物（今はマジなのでなし）が行動を終えて腕を伸ばしている間に、右足で地面を蹴りふところに入り込みあごをねらって左手でアッパーを繰り出す。

「ふっ」シュツ、ゴキツ

「プガッ！？」

化け物の体が浮かび上がる。

相手に次の行動の隙をあたえない。

右足を軸に、

右フック

シュツ、バキツ

「プツ、グツ」

そのまま右腕を唸らせ、無理やり地面へと叩きつける。

ガンツガガガッ

土が舞い上がり化け物が転がる。こん棒を手放した。

これでラスト。

化け物が立とうとしてる間に、左足を引きずりながらも化け物に駆け寄る。

「はああー」

化け物が立ち上がるのと同時に、俺の一番の得意技

コークス・！！！！？

「があああつ！？」

グツ、こんなときに左足が・・・！！？ツ

化け物に目を向けると眼前には真緑の拳が

ゴシツ——バシンツ

「がつ」

次は俺が叩きつけられた。5メートルぐらい後ろにあった木に。
一瞬でも遅かったら死んでたな、俺。

殴られるときに俺は、左腕でガードしてた。そのおかげで左はもう使えない。

意外と力つよかったな。

「ごふつ・・・！！？」

咳と一緒に血へどまで出やがった。こりゃあ、肺に穴あいたな。

化け物がこん棒を拾ってこっちにゆっくり近づいてくる。

ああ、終わった。もう立つことさえできない。あんな奴に負けるのか・・・。

化け物は俺に死刑宣告を告げる茶色の得物を高く振り上げた。きつと、頭を狙っているのだろっ。

「プガーッ」

今までの怒りを全部含ませたような声を出し、化け物はそれを振りおろした・・・。

——ザシュンッ

ゴトッ、く、く、く、ぶしゅー

俺は痛みと疲労で意識を手放した。

三話

『???』

あー。

やっぱ冒険者向かないのかな、私。

二日かけてやっとゴブリン4体討伐って、これじゃ生活が成り立たないよ。

宿代、剣の修理代、防具の新調、女の子らしい事が一つもないのはしかたがないよ。

おしゃれをしようと思っても、^{メタル}Mが足りないもん。
これからどうしようかな・・・？

ウウウググウウ

小さいからよくわからないけど、ゴブリンの鳴き声？かな。
あっちの方から聞こえる・・・行ってみよう。

*

*

*

向かった先で私が見たのは、

素手でしかも防具らしき物は一つも身につけず

ゴブリンを地面に殴りつけてた

自分と同じ年ぐらいの男のひとだった。

すごい……。いくら相手がゴブリンでも、あれじゃ真っ裸同然なのにゴブリンをおしている。

一瞬、顔が見えた。

目はキリッとしているけど、何処にでもいるような中性的な感じ。髪はぼさぼさだけど純粋な真っ黒。

まあ、かっこいい部類に入らと思う。

ところで吹っ飛ばされたゴブリンは……。もうふらふらだ。

別にあーゆう魔物を吹っ飛ばすのは珍しい事じゃない。冒険者なら、出来ない人のほうが少ない。

だけど、それは武器を必ず装備しているからだ。『装備無し』を基準に入れたらその数は、ぐっと減るだろう。

それを彼は軽々こなしている。

本当の冒険者は彼のような人のことを言うんだろっとなあ。私じゃ論外だね。

そろそろとどめをさすみたい。

最後もやっぱり拳を振り「ゴシッー!? 逆に吹っ飛ばされた!?!? なんてっ? 間合いは完璧だったはず……!?!?

大変！ゴブリンが・・・彼のもとへ。

体は動いていた

お願い・・・間に合って・・・。

走りながら越に装備してある剣の柄を握る

ゴブリンがこん棒を振り落とそうとしたまさにその時

剣を抜き放った・・・

——ザシュンッ

ゴトッ、く、くぶしゅー

ゴブリンの首が落ちて血が吹き出た

「ふう、何とか・・・間に合った・・・」

ため息をついて彼を見える。

呼吸をしてる音が聞こえるから気を失っているみたいだ。

「どうしよう・・・」

今さらだけど、この服見たことない種類。
とりあえず、怪我がないか見てみよう。

骨が何本か折れてるわね。腕とろつ骨が。
下手に動かしたら危ないし、様子を見ましょ。

私、よくゴブリンの首とばせたわね・・・。

* * *

ガサガサ、クガー、ピロピロピロ、・・・ギャオオーン

・・・パチッ

変わらない目覚め方、変わらない景色

「夢じゃなかったのか」

そつとつぶやいたその声には少し悲しみの色が混じっていたように聞こえた

「ん、起きたの？」

・・？ちよつと状態を確認してみよう。

さつきと変わらず生い茂っている草木。

暗くなつた夜空。

横になつてゐる俺。

子供には見せられない物体X。

可笑しなものがもう出てきたけどまだまだ行くよーww

「ねえ、聞いてる？」

遠くからこつちを睨む物体X。

俺が寝ている横で体育座りをする、俺と同じ歳ぐらいの女性。包帯がまかれた俺。あつ、あの時折れてたのか。

ん、物体Xが何だつて・・・。

さつきの化け物（笑）だよ。

さて変わったところと言えば、ほぼ全部？

「しゃべれないの？」

「いやいやしゃべれるよ」

額に血管が浮かんだ。

「じゃあ、なんで黙ってたの？」

選択を間違えていたら俺は死んでいただろう。

「いろいろと考え事をしてて」

「ふん……。体は大丈夫？」

異常は……。ないかな。左足はいつもの事だし。

「ああ、大丈夫だ。この包帯は君が？」

「うん、そうだよ……。ところで私はミルア・シスハート。あなたの名前は？」

？、聞きなれないな。外国人か？

「俺の名前は、深唄翼。みうたつばさ君ってどこの国の人？」

「ミウタ？が名？」

「いや、翼が名前」

「？そうなの。さっきの質問のクニって何？」

はい？……。質問を変えよう。

「じゃ、じゃあここってどこ？」

「・・・ここは、メルビア大陸の力カの街の近くの『力カの森』よ」

「・・・どこや・・・。」

「どうしたの？かたまって」

「・・・地球って知ってる？」

「チキユウ？さつきから意味わからない事ばかり言ってるけど、本当に大丈夫？」

「・・・オーマイゴツト！！
ここ地球じゃないのか・・・。」

俺はどうやら・・・異世界とやらに来てしつまたようだな。

「あー、驚かないで聞いてほしいと思う」

「なに？」

「俺はこの世界の住人じゃない。ふつとした拍子に飛ばされた異世界人だ」

「・・・ヘーソウナンド」

「おいっ！そんな目で見るな。事実だ、信じてくれ」

一瞬、ミルアの目がゲテ物を見ているような眼に変わった。
話は、変わるがミルアは・・・

とても可愛い。

目はぱつちりと開いて、人なつっこそうな顔立ち。

髪の色は緑色で、髪質はつやつやサラッ。

スタイルもかなり良い。

「信じてもらえないだろうか？」

「・・・いいえ、信じるわ。この森で防具を着用しなくて武器も持たない痛い人を見たら誰だって信じるわよ」

「痛いって言わないで！」

こんな美女に痛いって言われたらさすがに傷つくよ。
今なら、泣けるよ。

「・・・それじゃあ街に行こう。話はそれからってゆう事で。」

「ううう。わかった・・・悪いが肩を貸してくれ。一人じゃ立てない」

「・・・わかったわ。はい」

俺達は歩き始めた。

俺は彼女の後ろを歩いている。
なぜかって？

美人に冷たい目で見られ、痛い子あつかい。
拳句の果て、何から何までやってもらう。

俺あ今、涙が止まらねえぜ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3218ba/>

ボクサーの異世界転移

2012年1月9日21時54分発行